

人格の同一性を問うということ

福田 敦史（慶應義塾大学）

「人格の同一性」という問題は、しばしば「人格が同一であることの基準はどのようなものか」といった形で提起される。こうした基準についてのさまざまな考察が重要であることは言を俟たないが、とはいえ、人格という概念が原初的であることを常に念頭において考察することは重要であろう。ここで言う人格概念の原初性とは、身体という概念に対する原初性であり、意識ないし記憶という概念に対する原初性である。

人格の同一性という問題において記憶説が取り上げられるとき、しばしば、ある記憶内容や心的内容といったものが個別に取り出され、それを当該の主体が有しているか否か、あるいは帰属できるか否かといったかたちで捉えられる。しかし、こうした「帰属されるべき記憶内容」「帰属されるべき脳状態」といった記憶の取り扱い、記憶を「人格としての人間の総合的な能力」という観点からみられた能力として捉えるのではなく、単なる一作用・一状態としてのみ捉える仕方ではない。このような、単なる状態としてみなされた記憶を基にした議論は、私たちの能力としての記憶、能力としての想起という側面を充分に考慮しているとは言い難いだろう。

また同様に、記憶が人格の同一性の問題において取り上げられる際、ともすると、記憶がそのまま何か純粋に意識的なものとされ、そこでは、記憶ないし意識が、人格としての身体とは相容れないものであるかのように扱われることがある。特にロックについての解釈において、その傾向は顕著であろう。

しかし、考えてみれば、これは奇妙なことである。私たちが想起すること、記憶していることというのは、当然のことではあるが、身体を有している自分が過去において経験したことである。人格を問題にする際には、その人格の、これまで生きてきたさまざまな「来歴（career）」という観点を取り払うことはできないのであり、このことは過去の体験を想いだすという想起においても違いはない。

能力としての記憶・想起とは、身体を有する人格が過去に体験したことを、さまざまな来歴を背景として想起することなのであり、このことは、ある意識状態や心的内容を、現在、ある主体に帰属できるか否かという問題で解消されることではないのである。